大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

「子育て質問票」の「どちらでもない」回答と無回答の研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-04-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小池, 徳子, 木村, 長永, 三木, 直子, 高原, 主悦, 長谷, 祥香, 山田, 純平, 大江, 友里恵, 川部, 哲也, 橋本, 朋広 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005311

「子育て質問票」の「どちらでもない」回答と無回答の研究

小池 徳子，木村 長永，三木 直子，高原 主悦，長谷 祥香，
山田 純平，大江 友里恵，川部 哲也，橋本 朋広

Ⅰ．問題と目的

子育て支援に役立つ質問票（以下，子育て質問票）とは2010年度より，本学心理臨床センターにおいて，その作成と臨床的使用について実践的に研究が積み重ねられてきたものである。川原ら（2013）によると，本学心理臨床センターでの心理相談を積む中で，子育てに関する相談が増え，それに伴い小児心身症や発達障害，虐待のリスクを来談者と共にセラピストが把握するための簡潔な質問票を開発し，来談者支援に寄与したいという意図が生じた。その為，子育て質問票の目的は①迅速かつ簡便に親子の状況を把握すること，②養育者による回答を通して子どもの状況を把握する視点を養育者自身に生じさせ，且つ来談への動機づけを高めることである。

子育て質問票は，心身症，発達障がい，家族機能・虐待問題の3つの観点より項目が作成された。心身症の観点からは「身体」「心身症」をキーワードに文献を集め，議論を行ない，項目を作成（高橋ら，2013）。項目は心身症であるかどうかではなく，母親や子どもの身体性について問う10項目になった。発達障がいの観点からは発達障がいに関する文献と，これまでの発達検査や心理検査についての概観，発達障害を持つ来談者とのセラピー体験から，10項目が作成された（川部ら，2013）。家族機能・虐待問題の観点からは既に虐待リスクをアセスメントするためのスクリーニング調査票が数多くあるので，そこから特に重要と思われる項目を選定・整理。家族機能についても質問紙がすでに開発されているので，家族の機能不全を測定するのに有効な項目を選定し，11項目を作成した（橋本ら，2013）。以上より，子育て質問票は「発達障がい」「親子のこころとからだ」「家族機能」という3つの観点からなる31項目で構成された（川原ら，2013）。

その後，現在に至るまで本学心理臨床センターに子どもの問題を主訴として来談した養育者（以下，臨床群）に子育て質問票を実施し，回答を集積している。子育て質問票の解釈には一般的な回答傾向を踏まえる必要がある為，子どものことで特に相談機関を利用していない養育者（以下，対照群）の回答も収集した。

川原ら（2014）は子育て質問票の回答の得点分布を行い，臨床群と対照群では回答の傾向が異なることが示唆された。総田ら（2014）は子育て質問票を見立てに生かした事例を検証し，質問票のプロフィールの類型化と継続事例における質問票の変化と経過の検討を行っている。それによると子育て質問票は通常の質問票のように特定の特性を「拾い上げる」ないし「測定する」機能は比較的弱く，SCTのように一種の刺激語として養育者から多彩な反応を引き出す投影法的性格が強いと述べられている。

小池ら（2015）は，臨床群と対照群のデータを合わせて因子分析を行い，5因子（①子どもの困難，②育児困難，③親子関係困難，④生々しさへの抵抗，⑤相互性）を抽出。各因子の特性について，それぞれの項目群で極端に高得点あるいは低得点の事例は，その因子の特徴をよく表していると考え，各事例の初回面接を検討し，考察を行った。第1因子「子どもの困難」高得点事例においては，殆どが子どもに発達障がいの診断，あるいは疑いがあった為，この下位尺度は子どもの発達障がい傾向及び養育者が子どもを発達障がいなのではないかと思っている可能性があると示唆された。第2因子「育児困難」高得点事例においては，子育ての相談を出来る人がいない，多忙であるなどといった子育て環境の大変さや，子ども自身，暴力など行動面の困難さを有しているといった特徴が見られ，子育て環境を主観的にどう捉えているかを反映していると考えられた。第3因子「親子関係困難」高得点事例においては，養育者と子どもの関係が閉鎖的になっている可能性が考えられた。第4因子「生々しさへの抵抗感」高得点事例においては，養育者が子育てを引き受けきれず，子どもと接した時の自分の感覚をあまり子育てに反映させにくい事例であると考えられた。第5因子「相互性」高得点事例においては，養育者自身の不安が意識されておらず，無意識的な母子密着の状態にあると考えられた。

以上より，子育て質問票の5つの下位尺度が子育て支援のアセスメントにおける指標となりうることが示されたが，小池ら（2015）の研究では高得点事例に着目した為，無回答や「3.どちらでもない」という中間の回答が多い特徴的な事例について検討することは出

来なかった。ゆえに本研究では無回答及び「3.どちらでもない」という回答の意義について検討することを目的とする。

Ⅱ．方法

1．調査時期及び調査対象者

調査時期は2011年11月～2015年12月である。この期間に本学心理臨床センターに子どもの問題を主訴として来談した養育者97名を臨床群とした。内訳は，父親5名，母親79名，両親ともに来談するなどし，いずれが回答したのか不明であるものが13事例で，平均年齢41.91歳，標準偏差（以下，SD）= 6.01である。子どもは男子56名，女子41名，平均年齢10.29歳，SD = 3.84であった。

高校生以下の子どもがおり，特に子どものことで相談機関を訪れていない養育者208名を対照群とした。内訳は父親5名，母親198名，不明が5名で，平均年齢41.79歳，SD = 6.38である。子どもは男子99名，女子92名，兄弟姉妹でどちらか分からないものや記入の無いものが17名，平均年齢9.85歳，SD = 5.03であった。

2．手続き

臨床群に対しては初回面接の前に子育て質問票を渡し，各自教示を読んで記入してもらった。対照群は高校生までの子どもを持つ養育者に手渡し，各自教示を読んだうえで記入してもらった。

3．分析方法

子育て質問票の臨床群用のものは「p18　どうしてここに来ないといけないのかわからない」「p19　今ある症状をいっこくも早く取り除いてほしい」の項目があるが対照群用のものにはなく，その2項目と，小池ら（2015）の因子分析において除外項目となった「c1　運動が得意だ」「c6　手先が不器用である」「p15　妊娠や出産の時に嬉しくなかった」の3項目を除いた合計26項目で分析を行なった。表1は子育て質問票の項目を因子毎に並べ替え，示したものである。

子育て質問票全体，及び小池ら（2015）が抽出した5因子それぞれについて，1事例あたりの「3.どちらでもない」と無回答の平均回答数と標準偏差（以下，SD）を算出。平均値から2SD以上多い臨床群の事例の初回面接について検討を行い，読み取れる事例の特徴と子育て質問票の関係について検討を行なった。

Ⅲ．結果

以下に「3.どちらでもない」の回答と無回答それぞれの平均回答項目数及び，SD，また今回事例を抽出するために用いた+2SDに値する回答項目数を示す。

1．「3.どちらでもない」の回答について

「3.どちらでもない」の回答の平均項目数は6.13項目，SD = 3.50であった。各因子別に見ると第1因子「子どもの困難」は8項目中平均1.88項目，SD = 1.46，第2因子「育児困難」は5項目中平均0.85項目，SD = 0.85，第3因子「親子関係困難」は6項目中平均1.82項目，SD = 1.41，第4因子「生々しさへの抵抗」は4項目中平均0.49項目，SD = 0.79，第5因子「相互性」は3項目中平均0.62項目，SD = 0.73であった。表2は「3.どちらでもない」の平均項目数とSD，それぞれ平均より+2SD項目以上多く回答している事例を一覧にしたものである。表2に示した通り，平均とSDより全26項目中14項目以上で「3.どちらでもない」と回答した事例が+2SD以上多く「3.どちらでもない」と回答している事例は，3事例抽出された。第1因子「子どもの困難」においては8項目中5項目以上で「3.どちらでもない」と回答した9事例が，第2因子「育児困難」においては5項目中3項目以上「3.どちらでもない」と回答した3事例が，第3因子「親子関係困難」においては6項目中5項目以上で「3.どちらでもない」と回答した4事例が，第4因子「生々しさへの抵抗」においては4項目中3項目以上「3.どちらでもない」と回答した4事例が，第5因子「相互性」においては3項目中3項目を「3.どちらでもない」と回答した2事例が抽出された。因子間にわたっている事例もある為，合計で16事例であった。

2．無回答の多い事例について

無回答の平均項目数は0.24項目，SD = 1.19であった。各因子別に見ると第1因子「子どもの困難」は8項目中平均0.12項目，SD = 0.76，第2因子「育児困難」は無回答の事例が無かった。第3因子「親子関係困難」は6項目中平均0.04項目，SD = 0.25，第4因子「生々しさへの抵抗」は4項目中平均0.04項目，SD = 0.23，第5因子「相互性」は3項目中平均0.02項目，SD = 0.13であった。表3は無回答の平均項目数とSD，それぞれ平均より+2SD項目以上多く回答している事例を一覧にしたものである。表3に示した通り，平均とSDより全26項目中3項目以上で無回答であった事例が+2SD以上無回答が多い事例に該当し，5事例抽出された。第1因子「子どもの困難」においては8項目中2項目以上無回答だった3事例が，第3因子「親子関係困難」においては6項目中1項目以上無回答だっ

表１　子育て質問票の各因子の項目

因子名	質問項目
子どもの困難	
	c7　ふとしたことで取り乱し，落ちつくのに時間がかかる。
	c8　友達と仲よくしたい気持ちがあるが，友達関係をうまくつくれない
	c11 子どもは私のいいつけをよく守る。
	c10 私とのコミュニケーションがスムーズである。
	c9　人からのちょっとした働きかけを嫌がる。
	c4　ルールのある遊びを楽しめる。
	c5　何が面白いのかよく分からない遊びを延々とする。
	c3　言葉の使い方に特徴がある。
育児困難	
	p1　育児の相談をできる人がいる。
	p5　誰にも育児を手伝ってもらえない。
	p9　育児に自信が持てない。
	p8　なぜか疲れやすい。
	p4　子どもが好きと思えない。
親子関係困難	
	p11 子どものいやな気持ちを取り除くことは母親の役目である
	p7　子どもが期待通りにいかなくて困る。
	p6　子どもの欠点が目につく。
	p12 子どもが何か悪いことをすると私のせいだと思ってしまう
	p10 子どもに対してイライラする。
	c2　感覚が敏感なときがある。
生々しさへの抵抗	
	p17 オムツを変えるのはゆううつだった
	p16 子どもに公園の砂場で砂遊びをさせることに抵抗がある
	p14 わが子が，なぜ甘えてくるのかわからない時がある。
	p13 子どもに関心を向ける余裕がない。
相互性	
	c12 子どもは気持ちが不安定になるとからだの調子が悪くなる
	p3　痛がっていることもの身体をさすると、痛みがおさまることがある
	p2　子どもと目が合うとうれしい
除外項目	
	c1　動が得意だ
	c6　手先が不器用である
	p15 妊娠や出産の時に嬉しくなかった
	p18 どうしてここに来ないといけないのかわからない
	p19 今ある症状をいっこくも早く取り除いてほしい

表２「3.どちらでもない」回答の平均項目数と標準偏差及び該当事例

項目	平均（SD）	平均 +2SD となる項目数	「3. どちらでもない」回答が +2SD より多い事例
子育て質問票全体	6.13（3.50）	14 項目	事例 F，事例 K，事例 T
①子どもの困難	1.88（1.46）	5 項目	事例 D，事例 F，事例 H，事例 J，事例 K，事例 S，事例 T，事例 U，事例 AA
②育児困難	0.85（0.85）	3 項目	事例 B，事例 I，事例 T
③親子関係困難	1.82（1.41）	5 項目	事例 D，事例 K，事例 R，事例 W
④生々しさへの抵抗	0.49（0.79）	3 項目	事例 F，事例 G，事例 I，事例 K
⑤相互性	0.62（0.73）	3 項目	事例 P，事例 BB

表3　無回答の平均項目数と標準偏差及び該当事例

項目	平均（SD）	平均 +2SD となる項目数	無回答が +2SD より多い事例
子育て質問票全体	0.24（1.19）	3項目	事例A，事例C，事例E，事例L，事例Y
①子どもの困難	0.12（0.76）	2項目	事例A，事例L，事例Y
②育児困難	—	—	該当事例なし
③親子関係困難	0.04（0.25）	1項目	事例A，事例C，事例E，事例L，事例M，事例Q，事例Y
④生々しさへの抵抗	0.04（0.23）	1項目	事例A，事例B，事例C，事例E，事例N，事例O，事例V，事例X，事例Z
⑤相互性	0.02（0.13）	1項目	事例F，事例K，事例L，事例M，事例Y

た7事例が，第4因子「生々しさへの抵抗」においては4項目中1項目以上無回答だった9事例が，第5因子「相互性」においては3項目中1項目以上無回答だった5事例が抽出された。因子間に亘っている事例もある為，合計で15事例であった。第1因子「子どもの困難」，第5因子「相互性」のみで無回答がある事例は無く，いずれも他の因子に亘って無回答が見られた。

Ⅳ．考察

Ⅲ.結果で抽出された事例について「3.どちらでもない」と無回答に分けて，以下考察を行う。

1．「3.どちらでもない」について

(1) 子育て質問票全体で「3.どちらでもない」の回答が多い事例

子育て質問票全体で「3.どちらでもない」が多い事例は3事例であった。事例Fは熟考せず行動化しやすい短絡性のある養育者であることが窺えた。事例Kは初回面接で今まで子どものことを分かったつもりになっていたが，そうではなかったと混乱している様子が窺えた。いずれの事例も，質問紙の回答において，熟慮せず，混乱をそのまま出したように考えられる。

事例Tは子育てに対して強く責任を感じ，子どもを理解したい気持ちがある様子が窺えた。関わろうという気持ちはあるが，子どもをちゃんと見ることが出来ていない様子が窺える。上記2事例に比べ，葛藤している様子からは子育てへの関与が窺える。

「3.どちらでもない」という回答は，回答者がその質問項目の内容を自分のこととして受けとめて吟味するのが難しかった可能性が推察される。

(2) 第1因子「子どもの困難」で「3.どちらでもない」の回答が多い事例

第1因子「子どもの困難」に含まれる項目において「3.どちらでもない」と多く回答していた9事例のうち，事例Hと事例Jは良い母親イメージを体現することにこだわっているように考えられる。子どもの対応についてどうしたらいいか分からず，母親とはこういうものではないかと子どものしたいようにさせ，子どもにとっての意味を深く考えることをあまりせず子育てをしているようであった。事例S，事例U，事例AAは養育者が神経症を患っていたり，フルタイムで働いているなど自分のことで手いっぱいになっており，子どもが見えていないように考えられた。子育てにおいて挫折感はあるが子どもがどう感じて，どう考えているかという視点で語られることは少なく，そう言う視点を持ちにくい様子であった。子どもと心理的に分離しきれていないように考えられた。

以上より第1因子に含まれる項目が子どもを主語に考えられるかどうかを問うているのではないかと考えられる。普段，親が子どもを主語にして思考することは難しいと推測される。ただし，質問項目として提示されたときには，“子ども”を主語にして思考することが可能であるが，該当事例では質問項目として提示されてもそれが出来ないのではないか。

一般的に発達が進むにつれ，他者を独立したものとして認識できるようになるが，子どもが出来ると一度子どもと融合し，もう一度子どもを独立した他者として成立させる再構成の作業が必要になると考えられる。しかし，事例の養育者の語る様子からは子どもが出来る以前から他者を独立したものとして認識するということに困難さがあった可能性が考えられる。ゆえにこれらの養育者はTh.に助けられてその過程を歩むのではないかと示唆される。

(3) 第2因子「育児困難」で「3.どちらでもない」の回答が多い事例

第2因子「育児困難」に含まれる項目において「3.どちらでもない」と多く回答していた3事例のうち「育児困難」のみ「3.どちらでもない」の回答

が多かったのは1事例で残りの2事例は他の因子でも「3.どちらでもない」が多く見られた。第2因子でのみ「3.どちらでもない」の回答が多かった事例Bは同居している世帯数が多く，養育者は色々な子育ての方針の中で子育てをしなければならず，子育てにおける支援の“器”が複雑であると考えられる。サポートを受けているという実感に乏しく，その余裕のなさからか子どもとのコミュニケーションが少なく，子どもに対してネガティブな気持ちも抱いている可能性が窺えた。「p1育児の相談ができる人がいる」，「p4子どもが好きと思えない」での「3.どちらでもない」は中間としてつけているというよりも，本当はかなりネガティブな感じを抱いているが，それを中立的な形で回答し，緩和しているかもしれないと推測される。

第2因子で「3.どちらでもない」が多い事例は，大家族であったり，単身赴任していたりするケースであるなど家族構成を見ると支援してくれる人がいるようでいないというような中途半端な状況なのではないかと推察される。また，第2因子単独で極端な回答になっているわけではなく，第4因子「生々しさへの抵抗」で無回答が多かったり（事例B）している。その為，他の要因との組み合わせで考える必要がある。

(4) 第3因子「親子関係困難」で「3.どちらでもない」の回答が多い事例

第3因子「親子関係困難」に含まれる項目において「3.どちらでもない」と多く回答していた4事例のうち第3因子でのみ「3.どちらでもない」が多かったのは2事例であった。事例Rは子育て質問票に於いて子どもとのコミュニケーションがスムーズであると答えていたり，砂遊びへの抵抗やオムツ交換への憂鬱な気持ちなど子育てに対するネガティブな気持ちを問う項目にはポジティブな回答をするなど一見子どもを可愛がろうとし，よいイメージを持っている様子が窺えるが，初回面接からは様々な機関を訪れ，発話を促してもらおうとし，自分との関係に関連付けて考えるということは希薄なように感じられた。事例Wは子どもの言葉の遅れを自分の育て方が悪いと周囲に言われ，自分の責任ではないことを認めてほしいことを語り，家族からの育児の支援はあまり望めない状況であることが窺えた。その状況を様々な機関に頼ることで補っていると考えられる。

第3因子「親子関係困難」で「3.どちらでもない」が多い事例は子どもの年齢や，主訴において共通点が多い。子ども自身の自閉傾向や発達の遅れが見られ，その為親子関係をそもそも構築するのが困難だったのではないかと考えられる。それと共に，自分のせいで子どもに遅れがあるのではないかという罪悪感も抱いていると考えられる。親子関係の困難さを回避しているわけではないが，意識的に悩まないようにしていると推測される。

(5) 第4因子「生々しさへの抵抗」で「3.どちらでもない」の回答が多い事例

第4因子「生々しさへの抵抗」に含まれる項目において「3.どちらでもない」と多く回答していた4事例のうち，第4因子のみで「3.どちらでもない」が多く回答している事例は1事例であった。事例Gは仕事が忙しくコミュニケーションの時間があまりなく，親として認識されていなかったのではないかと語ったり，子どもが親の離婚に対して平然としているなど家族としての結びつきが弱い様子が窺える。養育者は情緒的やりとりに遠さがあり，子育て質問票に於ける回答もオムツの交換や砂遊びへのネガティブな思いを「3.どちらでもない」と中間回答しているが，それは情緒的な関与の希薄さも影響し葛藤なく回答していると示唆された。

第4因子「生々しさへの抵抗」は回答の平均が低い項目群なので，中間の意味での“3”ではなく，実際には高得点の事例と傾向が似ているかもしれない。第4因子で高得点になる事例に比べ外面を繕うことなく「どちらでもいい」といった投げやりな感じがあると考えられる。実際には抵抗感は強いが，そのことについて考えていない可能性がある。

(6) 第5因子「相互性」で「3.どちらでもない」の回答が多い事例

第5因子「相互性」に含まれる項目において「3.どちらでもない」と多く回答していた2事例はともに第5因子のみで「3.どちらでもない」が多くなっていた。事例Pは兄弟事例で先に別の兄弟が来談しており，のちに導入となっている。兄弟の子育て質問票と比べると第5因子「相互性」は事例Pは「3.どちらでもない」が多いが，兄弟のものは低く回答されていた。経過の中で相互性が低い回答から「3どちらでもない」に変化した，あるいは兄弟の違いによって相互性の回答に差が現れたとも考えられる。養育者には自分との関係で問題を考えて自覚するという姿勢が見られず，子どもの事を問われる項目はネガティブに回答するが，自分との関係についての項目は中間になるようである。事例BBは子どもは母親に“見てもらう”ためにおもらしという方法で

発信している可能性が考えられたが，養育者は子どもの行動を自分との関係と関連付けて考えるに至っていないようであった。初回面接からは子どもが外で喋らないことに対して共感できない様子を示し，子どもと心理的な距離があるように思われたが，一方で母子が離れる場面が殆どないなど物理的にくっつくことで補っている様子が窺えた。

第5因子「相互性」で「3.どちらでもない」が多い事例は，共通の問題行動が関連している。その問題行動によって親は必然的にケアをしないといけない状況になるような事象であり，子どもはそれによって親の反応を引き出そうとするが，いずれの事例も子育てにおける必然的なケアに向き合うことへの困難さがみられた。

(7)「3.どちらでもない」の回答が2つの因子に亘っている事例

「3.どちらでもない」の回答が2つの因子に亘っている事例は事例Dと事例Iであった。

事例Dは第1因子「子どもの困難」と第3因子「親子関係困難」で「3.どちらでもない」の回答が多く見られる。子どもが問題行動によってSOSを出した時には話しを聴くなど子どもとの関わりはあるが，子どもの話すことが事実かどうか疑ったり，家族が先回りして不安を取り除こうとした結果，子どもの意向に反した行動をとるなど，子どもの気持ちや姿を見ていない様子が窺えた。これは第1因子「子どもの困難」で「3.どちらでもない」を多く回答した事例によくみられる傾向である。子どもが話した内容の真偽を疑う等，子どもとの言葉のやり取りによって親が子どものことを理解するという関係が上手く成立していないように考えられる。第3因子「親子関係困難」で「3.どちらでもない」が多い事例では親の罪悪感が背景に考えられたが，本事例はそれとは異なると推察される。しかし，親が子どものことを理解する関係が成立しにくいところは共通していると考えられる。

事例Iは第2因子「育児困難」と第4因子「生々しさへの抵抗」で「3. どちらでもない」が多い。ネガティブな要素に対して回答しにくく，「1.まったくあてはまらない」をつけないことで防衛するなど，守りの弱さが示唆される。多くの人が「1.まったくあてはまらない」や「2.ややあてはまらない」をつけるところで「3.どちらでもない」をつけており，第2因子「育児困難」や第4因子「生々しさへの抵抗」に関して，養育者は本来，もっとネガティブに感じているが，自分の痛みに触れにくいために「3.どちらでもない」と回答していると考えられる。

以上より，「3.どちらでもない」の回答が2つの因子に亘っている場合には各因子に立てた仮説の組み合わせで，見立てることが可能なのではないかと示唆される。

2．無回答の多い事例について

Ⅲ.結果に示した通り，第1因子「子どもの困難」のみや第5因子のみで無回答の項目が多いという事例はなく，第2因子「育児困難」では無回答がなかった。無回答自体が稀であることが示唆される。

(1) 全体で無回答が多い事例

子育て質問票全体で無回答が多い事例は5事例であった。事例Aは第1，3，4因子においても無回答が多いとして抽出された。第5因子は高得点であった。子どもの乳幼児期についてあまり思い出せないなど，子育てが体験として根付いておらず，母子密着というよりも融合していると考えられる。あまりネガティブな回答がなく，養育者自身が良いことをすると子どもに良い影響があるというのは答えられるのではないかと推察された。乳幼児期の事はあまり覚えていないが，育てにくいと感じたことは無いと話し，母親としての自覚が曖昧だったために子どもの事を引き受けられなかったのかもしれない。子育てに困難さを感じにくくポジティブであったが，質問票で改めて訊かれた時に直面化を促されて無回答になったと考えられる。主体的な母親役割を意識して来なかった可能性が示唆される。

事例Lは1枚目の子どもに関する項目が無回答であった。産みたくなかったと語るが，p15「妊娠や出産のとき嬉しくなかった」は当てはまらないにつけており，面接内容からも子どもに対する想いは強く感じられる。思いがあるからこそ，子どもに関する項目は答えられなかったのかもしれない。

事例Yも同じく1枚目を回答していないが事例Lが葛藤によって拒否したというのとは異なると推察された。当センターを選んだ理由はイメージでと話しており，他の機関やその場所で何が提供されているのかなどを吟味したり，熟考したりしていないようであった。申込票の記入に時間がかかっており，目の前のものに集中すると全体に注意が行き渡らなくなる養育者の特性も伺えた。故に1枚目の無回答も質問内容に反応してというよりも不注意の可能性が高いと考えられる。

事例Cは事例Xと兄弟の事例である。「p13子どもに関心を向ける余裕がない」については事例Xと同じで関心を向ける余裕があるなしに関わらず向けざ

るを得なかったと考えられる。「c2感覚が敏感な時がある」「c8友達と仲良くしたい気持ちがあるが，友達関係をうまく作れない」は養育者としての推測はあるかもしれないが，子どもの感覚が敏感かどうかや子どもの気持ちは子どもでない自分にはわからないという気持ちがある為，養育者からは判断しにくかったのかもしれない。その為，無回答なったと考えられる。

事例Eは夫は協力的ではないのに第2因子「育児困難」では子育ての支援が受けられている方向に回答している。p7「子どもが期待通りに行かなくて困る」p17「おむつを替えるのは憂鬱だった」において無回答であった。事例Eは子どもが小さいころに夜泣きや熱性けいれんがあり，大変だったこともあって子育てが体験化されていない可能性がある。“困る”という気持ちを抑え込んでおり，p7で“困る”という文言を見て反応した可能性が示唆される。初回面接より養育者は夜泣きで困っていた様子が窺える。

(2) 第3因子「親子関係困難」において無回答のある事例

第3因子「親子関係困難」に含まれる項目において無回答が見られた7事例のうち，第3因子のみでみられたのは2事例であった。事例Mは「p3　痛がっている子どものからだをさすると，痛みがおさまることがある」と「p12　子どもが何か悪い事をすると私のせいだと思ってしまう」で無回答となっており，これらの項目は養育者が原因，子どもは結果とも捉えられる項目なのではないかと考えられる。子どもが悪いことをすると，自分のせいだと思うなど親役割を強く意識している為に罪悪感や自責感があると推察される。親役割を全うしたいという気持ちはあるが実際には上手く関わったりできない為，葛藤が生じて無回答になったり，子どもが悪いのか，自分が悪いのかというように子どもと自分が融合するようにループし，うまく答えられなくなるのではないかと考えられる。

事例Qは父親が回答している事例である。第3因子「親子関係困難」に含まれるp11は「母親の役目である」という文言があり，当該事例は父子家庭であることからも子どもにとっての「母親」というところに葛藤を抱えていると考えられる。この事例の父親は子育てに関与していない可能性が推測される。

(3) 第4因子「生々しさへの抵抗」で無回答のある事例

上記第3因子の考察と同様，因子というより，無回答になった質問項目に焦点を当て，また他の質問項目の回答と合わせて考えるのが適当と考えられる。その項目に関連した葛藤や問題があると示唆される。想起する際に妨害しているものが事例ごとに何かあると考えられる。

第4因子「生々しさへの抵抗」で無回答のある事例に含まれる項目において無回答が見られた9事例のうち，第4因子のみでみられたのは5事例であった。事例Nは子どもについて問われる項目は子どもに訊きながら回答している様子が確認されており，書き直しが多い。「p14　子どもがなぜ甘えてくるのか分からない時がある」が無回答で子どもが甘えてくることがあったのか，あるいは子どもの甘えを感じる余裕が養育者にはなかったのかもしれないと推察される。一方で第2因子「育児困難」の得点が低いが，初回面接とのギャップが窺え，現実と養育者の認識が離れている可能性が考えられる。子どもに何かしてあげたがうまくいかなかったという記憶は印象に残っている様子で，「母親の役目」や「自分のせいと思う」という項目は「3.どちらでもない」をつけ，子どもへの効力感が乏しく，それを認識しない，あるいはしていない可能性が考えられる。

事例Oはp14と「p15　妊娠や出産のとき嬉しくなかった（除外項目）」，「p3　痛がっている子どもをさすると痛みが治まる（第5因子）」が無回答である。第1因子「子どもの困難」において高得点で中間回答が少ない。初回面接の内容からは，子どもとの間で甘える，甘えさせるという関係を作ることが困難であったことが窺えた。子どもが潔癖であること，養育者は自らが家族の中で孤立していることについて初回面接で訴えている。

事例Vは「p16　子どもに公園の砂場で砂遊びをさせることに抵抗がある」「p17　オムツを変えるのはゆううつだった」で無回答であった。p16，p17は子どもが幼い時のことを尋ねる項目である。初回面接からは幼少時に育児への関心が低かった様子が窺われ，当時の憂鬱や抵抗についてあまり自覚がなかったり，考えたり，悩むということが無かった可能性が考えられる。

事例Xは事例Cと兄弟事例であり，事例C同様，子どもは発達の問題を抱えていることもあり，子どもへの関心はずっとあるのではないか。養育者にとって子どもに関心を向けるのは自明で余裕がある

から子どもに関心を向ける，無いから向けないというものではないので回答できなかったのではないかと考えられる。

事例Zはp16，p17が無回答で「1.まったくあてはまらない」につけることが少なく，第4因子以外は得点が高い傾向にある。子どもが小さいときに家族内に大きい問題が生じている。子どもが幼かった時に子育てに対して「ゆううつ」や「抵抗がある」など思う余裕もなかったのではないか。また養育者の動き方は子どもの言いなりで“子どもの為”として動くので，“憂鬱”や“抵抗”というのは感じる次元にいないのではないかと考えられる。その為，“あてはまらない”という回答もしないのではないか。

(4) 第5因子「相互性」において無回答のある事例

第5因子「相互性」に含まれる項目において無回答が見られた5事例のうち，第5因子のみで見られた事例は2事例であった。

事例Fは「c12　子どもは気持ちが不安定になるとからだの調子が悪くなる」で無回答であり，この項目は事例Fの子どもの主訴そのものであると考えられる。子どもの体調不良を言葉で表現できない代わりだと語るものの，子どもについてわからないと答えることが多く，子どもの事を抱えたり，理解したりするということが乏しい様子が推測される。子どもを抱えることが乏しい為に，主訴が生じているのではないかと養育者の無意識の部分で感じられているものの，子育て質問票で回答する際には強い抵抗が生じたのではないかと考えられる。

1の（1）で述べたように，事例Kは子どものことをわかっているつもりであったが，問題を通してそうではなかったことに直面している様子で，回答は熟慮していないように思われた。養育者には今までしてきたことが何の効果もなかったのではないかという混乱が生じている様子が窺えた。「p3　痛がっている子どもの体をさすると，痛みがおさまることがある」において無回答で，これは養育者が子どもに対して何か良い影響を与えられなかったということへの戸惑いが無回答という形で表れていると考えられる。

いずれの事例も子どもの不調に関する項目で無回答がみられ，子どもの状態に対しての自責感であったり，混乱による不注意があったりすることが考えられる。

(5) 無回答について

以上より，無回答に関しては，その項目の解釈は一義的なものではなく，他の因子および項目の回答と照らし合わせながら考えなければならない。同じ項目での無回答でも事例Lと事例Xのように異なり，面接の内容や他の回答と合わせて考えることで有意義になると思われる。また無回答がある事で，他の項目の回答にも意味が付与されると考えられる。

V．まとめと今後について

以上より，「3.どちらでもない」という回答は，その項目の内容及び，因子毎に考えられる内容を受け入れることに抵抗や困難があったり，耐えられない可能性が考えられる。

第1因子「子どもの困難」で多くみられる場合，“子ども”を主語にして思考することが難しい状態で，子どもを独立した他者として成立させる再構成の作業が必要であると考えられる。第2因子「育児困難」で多くみられる場合，支援してくれる人がいるようでいないといった子育てにおける支援の”器”が複雑であると考えられる。第3因子「親子関係困難」で多くみられる場合，親子関係の構築が困難になっており，その困難さを意識的に悩まない，現在の問題に絡めないようにしていると考えられる。第4因子「生々しさへの抵抗」で多くみられる場合，中間の“3”ではなく，無意識的に生々しさを伴った親子関係について抵抗があるが，意識的には考えないようにしている可能性がある。第5因子「相互性」で多くみられる場合，自分との関係で子どもの問題を考えたり，自覚したりすることがあまりない状態で自分との関係において考えることに抵抗があると考えられる。2つの因子に亘って多くみられる場合は，上記の仮説の組合せで考えることが可能であると示唆される。

無回答はそれ自体あまりない為，無回答がある場合は注意する必要がある事が示唆される。因子毎に捉えるよりもその質問項目ごとに考察する方が有意義であるように思われ，各項目に関連した葛藤や問題があると考えられる。第3因子「親子関係困難」は構成する項目が罪悪感の絡む項目と考えられ，罪悪感をうまく引き受けられないと回答が困難になるのではないかと考えられる。第4因子「生々しさへの抵抗」においては子どもが幼い時に養育者がどう感じていたかを問う項目が含まれており，養育者が想起する際に妨害しているものが事例ごとにあると考えられる。

これらの考察は限られた事例の中で行われたもので

あることに留意しておく必要がある。子育て質問票の回答を得点としてのみ見てしまうと見逃されてしまうところに焦点を当てたことで，子育て質問票のこれまでとは異なる見方を提示できたように思われる。今後は事例検討も並行して行うことで，子育て質問票をどのように子育て支援に役立てていくかを研究していく必要があると思われる。

引用文献

橋本朋広・松本　緑・後藤貴一・岩佐陽子（2013）．家族機能及び虐待リスクを捉える尺度項目作成の試み．大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要，6，33-37.

川原稔久・総田純次（2013）．「子育て支援　質問票」研究の背景と全体像．大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要，6，3-8.

川原稔久・川部哲也・長谷川智枝・橋本朋広・髙橋幸治（2014）．「子育て質問票」の得点分布の研究．大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要，7，17-27.

川部哲也・長谷川智枝・西地まどか・平岡尚子・呉伽耶・堂野和人（2013）．発達障がいの特徴を捉える尺度項目作成の試み．大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要，6，3-8.

小池徳子・三木直子・川部哲也・木村長永・高原主悦・長谷祥香（2017）．「子育て質問票」の因子構造とその特徴の研究．大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要，10，57-64.

総田純次・平岡尚子・西地まどか・作田大輔・澤樹亜実・後藤貴一・川原稔久（2014）．心理臨床センター臨床事例における子育て質問票プロフィールの研究．大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要，7，29-36.

髙橋幸治・作田大輔・澤樹亜実・河邑淑子・石田暢子・中島　歩（2013）．親子の心と体の関係を探る尺度項目作成の試み．大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要，6，9-19.